

「知らせることの危険」「悪い意味でない疑問」が確信に変わるとき

今崎牧生

4名の方、ともに内容と表現、共に素晴らしくひたすら頷いて聞くばかりであった。その中で、大久保真紀さんのお話に絞って感想を述べたいと思う。

太田秀樹先生への密着取材からは、ジャーナリストの基本姿勢を学ばせて頂いた様に思う。信頼は一方通行ではない。「悪い意味でない疑問」が確信に変わるとき、取材される対象もまた、より心を開いているのではないか。その道のりが早いときもあれば、諦めなければならぬこともあるかと推測された。

FAPについてのお話は壮絶であった。

特定の地域に集積性がある疾患についてはいくつか知られている。FAPについては今回初めて知ることになったが、これだけはっきりした遺伝性と極端に狭い地域での発症、そして難治性を考え合わせると長い歴史の中でこの遺伝子を持った方々が受けてきた差別やその果てに人里離れて隠れ住むかのような生活形態など図りし得ない苦難があったことを想像するのは難くない。

遺伝診断、移植医療、どちらも始まったばかりの先端医療であった時期に大久保さんはこの疾患と巡り会う。特に移植医療は技術が先行し、社会状況がついていけない為に次々と新しい問題に直面する事になって現在に至っている。

福岡での偶然の出会いからFAPを巡る事実を世の中に知ってもらおうと、粘り強く関係性を構築されたのは記者魂というべきものであろうか？

そこに職業人としての倫理観を強く感じた。ひっそりと運営されている患者会。知られることでのデメリットの方が遙かに大きかったであろう。志多田さんが取材に応じたのは、大久保さんが「知らせることの危険さもわかっている方だ」と判断されたからではないだろうか。

それから12年。短い時間のお話の行間に、志多田さんに寄り添い、「記録」を残すことの意義を重く受け止め、ナイーブな事情に抵触しつつ思いを貫き通し、本として上梓されたことは実に立派なことだと思う。

現在もこのように鋭い感性をとがらせながら、危険な橋を渡りつつ記者としての使命を全うされている方の生の声を聴けたのは貴重な体験であった。